

弥生時代の出雲平野における 水域復元 高橋 周

1. はじめに

『出雲国風土記』神門郡条に「神門水海」が見えるように、奈良時代の出雲平野西部には斐伊川や神戸川が注ぐ大きな潟湖があり、現在とは異なる景観が広がっていた。この出雲平野の景観は、弥生時代には既に形成されていたようである。

出雲弥生の森博物館のエントランスに1/6000の航空写真を展示するに際し、出雲市内の主な遺跡や古墳、指定文化財を所有する寺社など（付表）を示すとともに、「弥生時代の水域」（巻頭カラー PL.2・3）を復元して表示することとなった。後述するが、出雲平野における水域の復元については、数多の研究が積み重ねられている。できるだけ多くの研究を参考にしたが、至らない点も多々あるかと思う。以下、諸賢のご批判ご叱正を得ることができれば、幸いである。

なお、水域を復元した弥生時代は2500年前～1850年前と長期間にわたる。当然のことながら、その間にも景観の変化が続いていたと考えられる。ここでは細かな時期設定を行わないが、2100～2000年前の弥生時代中期を凡その時期としたい。

2. 出雲平野の水域復元 —研究史—

完新世における出雲平野の水域復元に関する研究史は、徳岡隆夫氏がまとめている（徳岡1996）。それによると、古地理図としての嚆矢的な研究は、日本地質学会の見学旅行案内書に掲載された大西郁夫氏によるものである（図1、大西・松井1980）。

大西氏が作成した古地理図は、その根拠を示されないが、その後に提示された諸説に対して影響を与えたとされる。その後、中海の干拓・

淡水化の論議が進む社会的な背景もあり、自然史的側面の研究が進められるようになる。その研究成果を背景として、徳岡隆夫・大西郁夫・高安克巳・三梨昂氏らが約2万年前（更新世後期後半）から約1200年前（奈良時代）までの古地理の変遷を示している（徳岡ほか1990）。そのうち、弥生時代に係る古地理として、約2400年前の様相を提示する。その委細については論及されていないが、「弥生の小海退」による海面低下を想定し、出雲平野西部に存した潟湖は現・神西湖付近に汽水域を残すのみとなった、とする（図2-②）。

一方で、林正久氏はテフラ（火山性噴出物）などを指標とした沖積層の分析や微地形分類によって、出雲平野の地形発達を考察する（林1991）。それによると、3600年前の三瓶山噴火による火砕流が大量のデイスサイト礫を神戸川河口から供給し、扇状地性三角州を急速に前進発達させた結果、平野の一部が島根半島とつながったとする。このような由来をもつ標高5m以上の扇状地性三角州を「三角州Ⅰ面」とし、また、古志～塩冶～矢野付近にかけてみられる微高地面はそれに先行するものと指摘する。弥生時代以降、三角州が前進する過程で形成された標高2～3m以上の地形を「三角州Ⅱ面」として、奈良時代には出雲平野西部で「三角州Ⅱ面」が形成されたと指摘する（図6）。

林氏が、弥生時代に係る古地理図として提示したのは、縄文時代末期～弥生時代初頭の様相である（図3-②）。この復元は、「三角州Ⅰ面」の分布に基づくもので、出雲平野西部に存した潟湖の汀線として出雲市平野町～矢野～天神～知井宮～神西のラインを想定する。斐伊川の流路は想定していないが、北山山地南麓には帯状の低湿地が広がっていたとし、古宍道湖の汀線は斐川町直江～出雲市西代を結ぶ位置にあったとする。

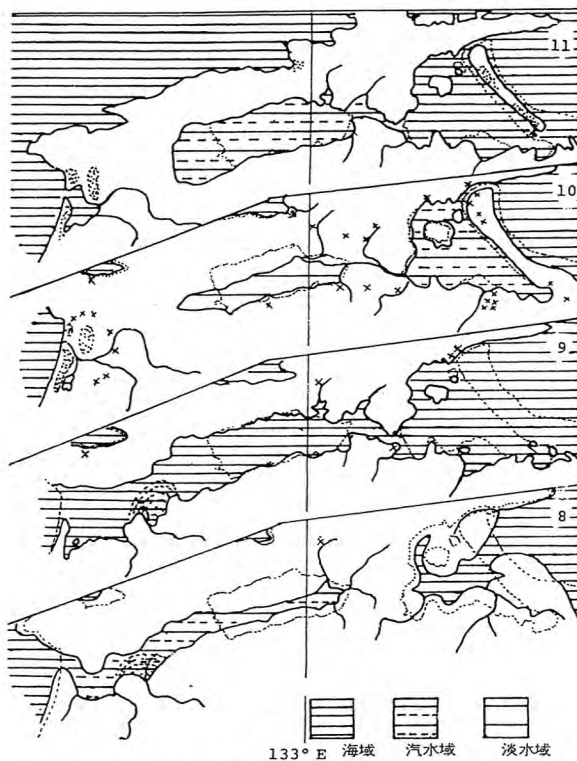


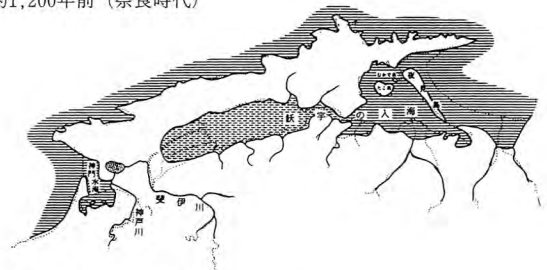
図1 中海・穴道湖の古地理

8：縄文早期（約7000年前），9：縄文中期（約4000年前），10：弥生後期（約1800年前），11：風土記時代（約1200年前）

その後、博物館の展示や研究論文において、出雲平野周辺の水域復元がいくつか提示されるものの、その論拠を掲げるものは多くない。そのうち論拠が明示されたものに、低湿地遺跡の発掘調査で得られた地質学的資料とボーリング資料から、完新世の海面変化と古地理の変遷について考察した中村唯史氏の研究がある（中村2006）。

中村氏は、朝酌川遺跡群の河川堆積層の調査成果によって、縄文時代晩期（2500年前頃）から奈良・平安時代（1200年前頃）にかけての海水面は標高0m付近にあったとする。また、1700～1500年前頃に-0.4～-0.1mの若干の海面低下の可能性もあるが、基本的に大きな海面変化はなかったとする。これらをふまえて、中村氏は徳岡氏らの論考（徳岡ほか1990）に基づき約2000年前の様相を提示する（図4-②）。徳岡氏らの案とは想定時期が若干異なるが、神

① 約1,200年前（奈良時代）



② 約2,400年前（弥生時代）

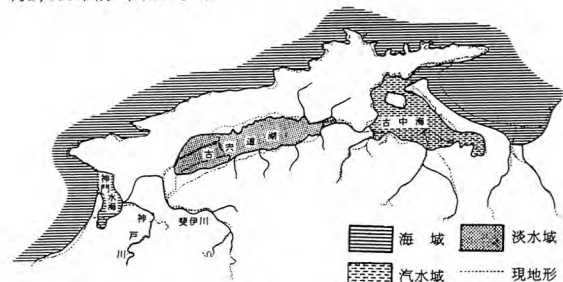
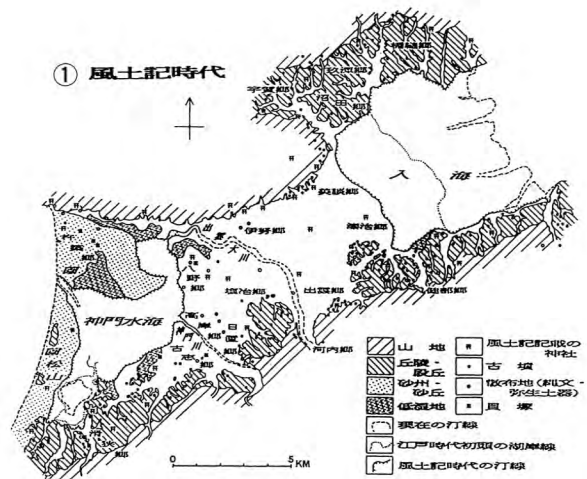


図2 中海・穴道湖を中心とした古地理の変遷



② 縄文時代末期

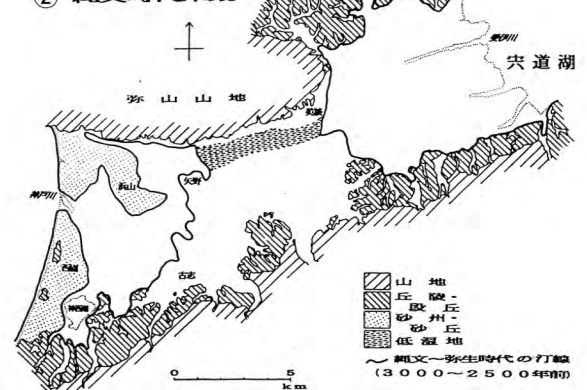


図3 出雲平野の古地理

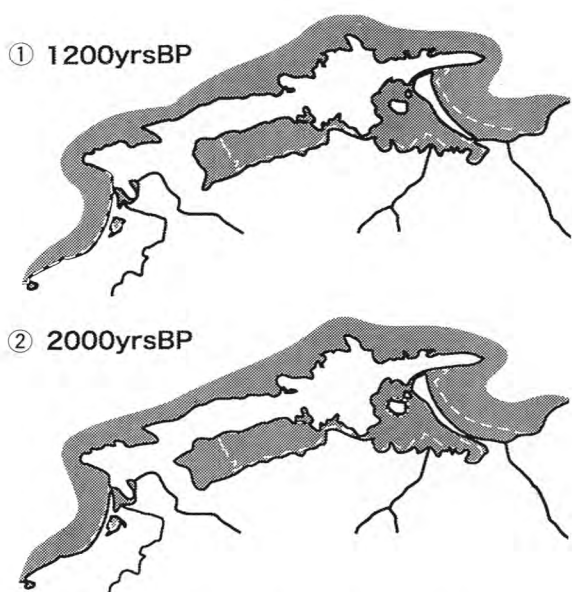


図4 中海・穴道湖の古地理変遷

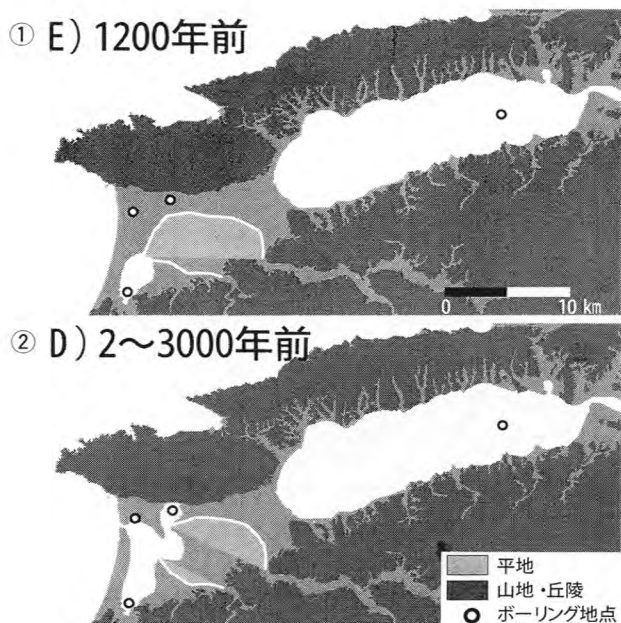


図5 完新世における古地理の変遷

西湖の分離と出雲平野西部の潟湖の拡大を示したところに大きな特徴がある。中村氏は矢野遺跡の報告書に係る論考（中村2010）においても2000年前の様相を提示するが，その内容に大きな変更点は見られない。

また，島根県古代文化センターによる「風土記時代の歴史景観復元事業」に伴う学術調査用ボーリングの成果に基づき，山田和芳氏と高安克己氏が2～3000年前の出雲平野の古地理を提示する（図5－②）。同事業による成果を，表1にまとめるので参照されたい（山田・高安2006a・2006b・同2007）。弥生時代については，弥生時代後期（1900年前頃）に出雲平野西部の潟湖が淡水性から汽水性へ変化したこと，大社町遙堪周辺に想定される斐伊川河口デルタが古墳時代中期（1600年前頃）から前進し，短時間で潟湖北部を埋積したことなどを明らかにする。

弥生時代における出雲平野の水域復元の試みは，管見の限りにおいて以上のごとくまとめることができるが，いずれも小縮尺の地図による概括的なものである。基本的には出雲平野西部の潟湖の存在は共通するが，浜山砂丘より東側の潟湖がどの程度埋積したのかという点において，それぞれに見解が異なることは注目されよう。

すなわち，斐伊川河口デルタの埋積をどのように捉えるかということが，水域復元のポイントと見ることができる。

表1 ボーリング調査による古環境復元

時代 ボーリング調査地	縄文時代			弥生時代		古墳～奈良・平安時代	
	4000年前	3900年前	3000年前	2000年前	1800年前	1400年前	1100年前
大社町遙堪地区	閉鎖的な汽水性湖沼		淡水性湖沼	汽水性湖沼		河口・河川性後背地	
出雲市下横町地区	閉鎖的な汽水性湖沼	河口域			河口域の堆積		河口域の前進
出雲市大島町地区	閉鎖的な汽水性湖沼	淡水性湖沼			汽水性湖沼		
神西湖中央部	閉鎖的な汽水性湖沼	淡水性湖沼			汽水性湖沼		



図6 出雲平野の微地形分類図

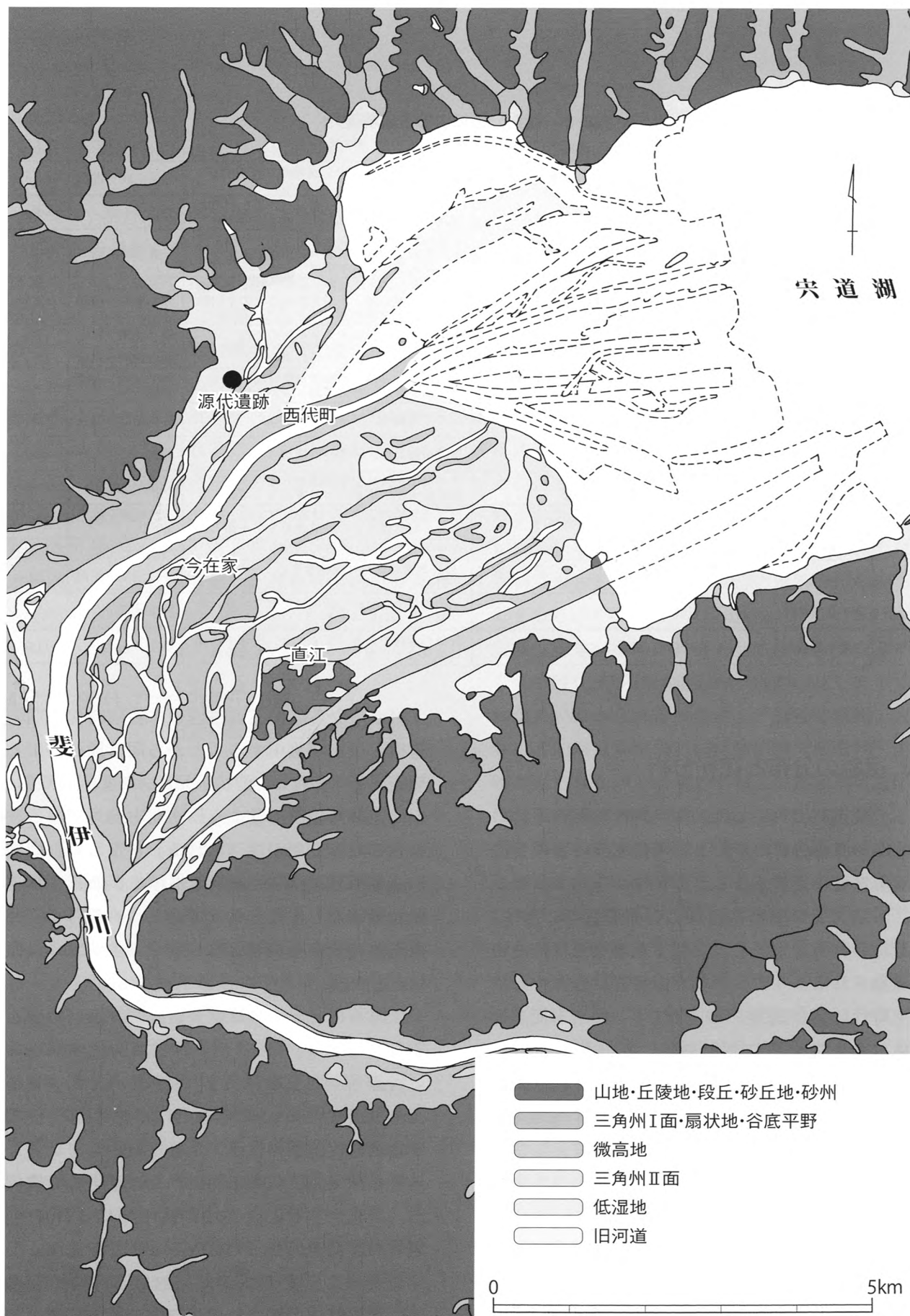


表2 花粉分析による古環境復元

区分	遺跡名	所在地	周辺環境	植生	該当時期	報告書
北部	源代遺跡	国富町	低湿地、次第に水田開発	イネ科増加、谷間の低湿地のスギ林減少、山地にはカシ類	弥生中期～古墳	(1)
	門前遺跡	東林木町	水田地帯	イネ科高率、オモダカ属・セリ科などの水田雑草増加、スギ減少、アカマツ増加	弥生～中世	(2)
	山持遺跡	西林木町	旧河道の沼沢湿地	水辺にガマ類・アシ・カヤツリグサ類繁茂 自然堤防上にヨモギ類・アブラナ科・シロザ、北山山地にスギ卓越	～弥生終末期	(3)
	里方本郷遺跡	日下町	沼沢湿地、周辺で水田開発	アシ、ホタルイ・スゲ・カヤツリグサの繁茂、オモダカ属・イボクサ属などの水田雑草、アカマツ林の拡大	弥生前期～中期	(4)
	五反配遺跡	大社町	沼沢湿地	カヤツリグサ科繁茂、スギ林の増加	縄文晩期～弥生	(5)
中部	高岡遺跡	高岡町	斐伊川の作用による自然堤防	ササ類繁茂、クスノキ科の樹木生育	弥生後期～古墳	(6)
	矢野遺跡	矢野町	河道内もしくは後背湿地内	湿地にアシ・ヒシ類など湿性植物 草地にシダ類・ヨモギ類・ススキ類	弥生前期～古墳前期	(7)
	小山遺跡	小山町	小河川の跡に形成された凹地で水田耕作	ヨモギ属高率、イネ科の増加	弥生前期～奈良	(8)
	中野清水遺跡	中野町	湿原を流れる網状河川の一つ、後背湿地	湿性植物繁茂、スギ林の増加	弥生	(9)
	姫原西遺跡	姫原町	河川・淡水の沼沢湿地	イネ科増加、アシ原の広がりとかヤツリグサ科の卓越、周辺にヨモギの茂る草原	弥生～古墳	(10)
	荅丁田遺跡	白枝町	河道内もしくは後背湿地内	扇状地末端の沢スギ、水際にアシなどのイネ科、自然堤防上の微高地にヨモギ類	縄文晩期～弥生前期	(11)
	白枝本郷遺跡	白枝町	河川の流れが頻繁に変わる後背湿地	ブナ・ミズナラ・スギの増加	縄文晩期	(12)
	小畑遺跡	天神町	河川から後背湿地・沼沢湿地へ変化 雑草の生い茂る管理の悪い水田	砂丘地帯のクロマツ林せまる 平野部ではスギ林	弥生前期～中期	(13)
	藤ヶ森南遺跡	今市町	水田地帯	イネ科高率、背後の丘陵にアカマツ林、カシ類、谷沿いにスギ林	弥生後期～奈良	(14)
南部	古志本郷遺跡	古志町	集落内、周辺に水田	背後の丘陵にスギ・アカマツ、遺跡中西部にニョウマツ類、近辺にハンノキ湿地林	弥生～古墳	(15)

3. 遺跡の分布と花粉分析

水域復元においては、弥生時代の集落遺跡の分布や花粉分析のデータより得られる古環境復元も重要な資料となる。

水域復元に関わる遺跡の分布を図6に示す。遺跡の分布と水域との関係で重要な点は、既に指摘されるように、出雲平野西部に分布する弥生時代の集落遺跡の多くが、「三角州Ⅰ面」上に立地していることである。各遺跡におけるボーリング調査でも「三角州Ⅰ面」を構成するデイサイト質の堆積物が確認されている（中村1998・2001ほか）。したがって、水域復元において「三角州Ⅰ面」を基本に考察を進めることは有効な方法と考えられよう。

また、出雲平野西部の潟湖の汀線付近と想定される井原遺跡において、旧河道跡と自然堤防跡が認められることは注目される（峰松2002）。旧河道跡は「旧河川」に伴う漸移層と湿地成粘

土層からなる。旧河道跡西辺に古墳時代中期の遺構・遺物が集中することから同時期の河川と想定する（岸ほか2002）。これらの遺構のうち、旧河道跡西辺を沿うように南北方向へ連なる波板状のピット列が注目される。すなわち、同様の遺構は山持遺跡（西林木町）でも確認され道路状遺構として捉えられている。おそらく、井原遺跡のそれも同様に道路跡とみられる（廣江ほか2010）。

これらのピット列は調査区南端で旧河道跡と重複しており、「旧河川」は古墳時代中期以前に機能したとみる方が妥当であろう。旧河道跡より西へ約40mの微高地上には弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が集中していることからすると、「旧河川」はこの時期まで機能し、埋積が進行した古墳時代中期に「旧河川」周辺の開発が始まったとみることができよう。

以上のような井原遺跡における環境の変遷は、古墳時代中期に斐伊川河口デルタが前進し短時間で潟湖北部を埋積したとの指摘（山田・

高安2006a)とも関連して、弥生～古墳時代における出雲平野西部の潟湖の様相を示唆するものといえる。

そして、出雲平野各地での発掘調査の際に行われた花粉分析のデータも、水域復元において貴重な資料となる。その花粉が含まれる層位の年代を比定する根拠に不確定なものも含むが、当時の植生の推定から付近の地形環境を考えることは有効な方法であろう。特に平野部での花粉分析において、付近に小河川の存在を想定する遺跡が多く認められることは注目される。すなわち、弥生時代の出雲平野には網状に小河川が流れ、あるいは旧流路には三日月湖などが残在した可能性が高いと考えられる。表2として、水域復元に際して参考とした花粉分析のデータを示した。

4. 弥生時代の水域復元作業 (一)

— 出雲平野西部の潟湖の汀線 —

弥生時代の水域復元として1/6000の航空写真の中で表現するに際し、基本的な資料としたのが「出雲平野 (地形分類)」(林2001, 図6)である。林氏は米軍撮影の航空写真に基づき、1/50000の地図に三角州Ⅰ面・Ⅱ面、微高地、旧河道などの地形分類を提示する。先述したように、弥生時代の集落遺跡の多くが標高5m以上の「三角州Ⅰ面」に立地し、ボーリング調査でもそれを形成したデイスサイト層が確認されることから、「三角州Ⅰ面」の範囲までは弥生時代において既に陸化していたという前提で捉えた。

そして、水域復元上でのポイントの一つとなるのが、平野西部の潟湖に注いだ斐伊川と神戸川の河口の位置である。この点については、山田・高安両氏の研究(山田・高安2006a・2006b・2007)に基づき、斐伊川の河口域を大社町遙堪地区周辺、神戸川の河口域を下横町地区周辺として捉えた。

以下、①斐伊川河口域、②神戸川河口域、③神西湖周辺での水域復元についてまとめる。

① 斐伊川河口域 (大社町遙堪地区周辺)

林氏の地形分類によれば、大社町遙堪地区の平野部(八島町・常松町付近)には「三角州Ⅱ面」が点在し、鳥趾状三角州の様相を呈する。鳥趾状三角州は大量の土砂が流出すると同時に、外海からの影響が少ない河口で発達する三角州で、斐伊川が平野西部の潟湖へ注ぐ作用で発達したものと考えられる。したがって、遙堪地区に点在する「三角州Ⅱ面」は、斐伊川河口デルタが前進し埋積を始める古墳時代中期までのいずれかの時期の様相を示唆するものとみられる。

また、斐伊川河口域周辺の「三角州Ⅱ面」については、先述した井原遺跡の遺構の様相が参考となる。すなわち、井原遺跡は「三角州Ⅱ面」と「低湿地」との間に立地しており、少なくとも弥生時代後期には周辺の一部が陸化した可能性が高いとみられる。ただし、遺跡の東側を流れた「旧河川」の周辺には弥生時代の遺構・遺物が見られないことからすると、当該期の遺跡は堆積の進まない「旧河川」の河口域に近く、平野西部の潟湖の影響を受けやすい土地だったと想定することができる。したがって、当該地における弥生時代の潟湖の汀線は、「三角州Ⅱ面」のラインよりも西を走っていた可能性が高いといえる。このように考えると、少なくとも弥生時代後期においては井原遺跡以北に分布する「三角州Ⅱ面」は既に陸化していたと捉えることができ、さらに、「低湿地」と地形区分される範囲でも、一部が陸化していたとみられる。

今回の水域復元においては、依拠するデータが少ないため、井原遺跡以北については「三角州Ⅱ面」を潟湖の汀線として捉えることとした。

② 神戸川河口域 (下横町地区周辺)

山田・高安両氏の研究(山田・高安2006a・2006b・2007)によると、神戸川の河口域は下横町地区周辺とされる。

また、神戸川河口域周辺の汀線を考える上で参考となるのが、白枝本郷遺跡である。同遺跡の調査の結果、その周辺は縄文時代後期ごろまで人々が生活できる環境にはなかったが、潟湖のような水域からは完全に分離していたこと、遺物包含層から弥生時代中期中葉の土器が出土することから、同時期には安定的に集落が営まれる環境が付近に存在したことが明らかになった（角田ほか2006）。

林氏の地形分類では、白枝本郷遺跡周辺には「三角州Ⅱ面」や「微高地」が点在する。これらは神戸川の旧流路に伴う自然堤防と考えられる。同遺跡の報文では自然堤防が浜山砂丘付近にまで早く到達したとして、弥生時代における潟湖のような水域の想定は困難としている。しかしながら、自然堤防の到達の時期をめぐる明確な根拠は示されておらず、直ちには従いがたい見解である。おそらく、弥生時代においては自然堤防が形成される途上と考えられ、神戸川河口域の自然堤防の一部に集落が形成されていたとする方が妥当ではなかろうか。

このように考えると、神戸川の河口域として、下横町および白枝本郷遺跡が立地する白枝町以西の地域を想定することができよう。想定範囲を超えるものではないが、神戸川の河口域は、上流からの大量の土砂と斐伊川からの水流により、カスプ状（尖状）三角州の様相を呈した可能性が考えられる。

汀線については、「三角州Ⅱ面」のラインが後世の影響を含む可能性があるため、今回の水域復元では採用していない。ただし、白枝本郷遺跡の調査から「三角州Ⅱ面」のライン付近に汀線を想定することは大過ないとみられる。したがって、現地形の4～5mの等高線を基準として、「三角州Ⅱ面」のラインと下横町および白枝町以西とみられる神戸川河口域の位置想定を勘案しつつ復元を試みた。

なお、等高線については国土地理院「25,000分の1地形図」（大正4年測図・昭和9年修正測図）「大社」「出雲今市」および中村唯史氏作成の地形図（中村1996）を参考とした。

③ 神西湖周辺

神戸川河口域以南から神西湖周辺にかけては、現在確認される弥生時代の遺跡（知井宮多聞院遺跡など）の分布と「三角州Ⅰ面」の範囲はほぼ一致する。

神西湖南岸に位置する西安原遺跡では、材を並べた木列状遺構と集石遺構が標高-0.4～-0.1mで見つかっている。弥生～古墳時代の遺構である。木列状遺構は、軟弱な湿地帯を歩くための木道で、接岸した舟までの道として想定される（西尾・野坂2000）。同遺跡は「三角州Ⅰ面」と「三角州Ⅱ面」の境に位置しており、弥生時代における付近の汀線は「三角州Ⅰ面」のラインを想定することができよう。

神戸川河口以北の地域の汀線では、「三角州Ⅱ面」のライン付近を想定したが、神西湖周辺では「三角州Ⅰ面」のライン付近が想定される。これは流入する土砂量の違いで、三角州発達に違いが生じたためと考えられる。

したがって、神戸川河口域以南から神西湖周辺にかけては、「三角州Ⅰ面」のラインと現地形の4～5mの等高線を勘案しつつ汀線の復元を試みた。

5. 弥生時代の水域復元作業（二）

— 宍道湖の汀線・斐伊川の流路と海岸線 —

現在の宍道湖西岸に広がる平野部は、斐伊川層と呼ばれる厚い堆積物に覆われている。層厚は平均4～5mであるが、斐伊川東岸では10mにも達する地点がある。古い堆積物を含むが、その多くは鉄滓を含む近世以降の「鉄穴流し」による生産土砂の堆積物である（林1989）。斐伊川鉄橋遺跡で地下7mから弥生時代後期～

古墳時代前期の土器が出土したように（池田ほか1980）、弥生時代の地表面は現地表面の4～5m以下に存するとみられる。したがって、現地形からの弥生時代の汀線推定は困難と言わざるを得ず、従来の諸説を比較しても宍道湖西岸の汀線は一致を見ていない。また、その根拠を示す所説も多くない。

その中で、林氏は「三角州Ⅰ面」の分布に基づき、斐川町直江～出雲市西代町のラインを宍道湖の汀線として提示する（林1996）。今回の水域復元に際しては、斐川町直江～斐川町今在家の現・斐伊川東岸までのラインについて、林氏の説を参考に「三角州Ⅰ面」の分布と現地形の等高線を勘案しつつ復元を試みた。

ただし、現・斐伊川西岸に関しては、遺跡の分布を考えると「三角州Ⅰ面」に依拠することはできない。すなわち、出雲市国富町の平野部に立地する源代遺跡の調査で行われた花粉分析やプラント・オパール分析の結果、弥生時代中期～古墳時代前半においては低湿地で水田開発が始まっていたことが明らかとなっている（古環境研究所1993、大西1994）。ただし、古墳時代後半には再び湖底となったとの指摘もあり、弥生時代の汀線は同遺跡から遠くない位置にあったものと考えられる。したがって、斐伊川西岸の美談町～平田町のラインについては、「旧河道」「低湿地」地形を参考に汀線の復元を試みた。

斐伊川の流路については、山田・高安氏が奈良時代の斐伊川（出雲大川）に関して、「近世以降の河川性（洪水性）堆積物に広く覆われているために、それよりも時代的に古い風土記時代の出雲大川（斐伊川）の旧河川・自然堤防は現在の地表面に表れていない可能性は極めて高い」（山田・高安2006a, 46頁）とする。まさに正鵠を射る見解である。本来は地質的なデータを参考にすべきではあるが、今回の復元に際しては、林氏が示す「旧河道」地形を参考とした（図6、林2001）。すなわち、斐伊川の流路につ

いては、出雲市武志町付近から西流し、荻村町～稲岡町～平野町を経て、大社町遙基地区付近を河口と想定した。一方で、西林木町に所在する山持遺跡では、縄文時代早期～弥生時代後期中葉までの斐伊川の堆積作用による厚い粗砂の層が確認されており（原田ほか2009）、武志町～西林木町・山持遺跡周辺から西流した可能性もある。ただし、同遺跡が弥生時代後期後葉には堆積作用のない安定した環境になるとの指摘もあることから、その周辺には斐伊川の分流が流れていたとみるべきではなかろうか。

先述したように、出雲平野には網の目状に河川が存在した可能性がある。細部にわたる復元は困難なため、今回の復元においては分流や中小河川は割愛し、主な河川のみを表わした。

また、海岸線については、基本的に大きな変化はなかったと考えられる。今回の復元においては、海岸砂丘の堆積などを想定した上で、現地形の等高線5～10mのラインで復元を試みた。

6. おわりに

以上、出雲弥生の森博物館エントランスの航空写真上に表現した「弥生時代の水域」の復元作業について述べた。

自前での地質調査を行わなかったため、結果として先行研究に依拠せざるを得なかったが、各地での発掘調査の成果を含め、現段階での成果を示すことができたのではないかと思う。

ややもすれば発掘調査で見つかった遺構・遺物が注目されることが多いが、その時代に生きた人々を支えた自然環境を考察することも大変重要な作業である。今後の研究の進展を祈りつつ、稿を終えたい。

【補記】「弥生時代の水域」復元作業にあたっては、中村唯史氏（島根県立三瓶自然館）よりご教示を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

参考文献

- 池田満雄・川上 稔・西尾克己ほか 1980『西谷墳墓群』古代の出雲を考える2, 出雲考古学研究会
- 大西郁夫 1994「平田市源代遺跡の花粉分析」『源代遺跡2』平田市埋蔵文化財調査報告第5集, 平田市教育委員会, 23-32頁
- 大西郁夫・松井整司 1980「島根県東部の第四系」『日本地質学会第87年総会・年会見学旅行案内書第1班』, 32頁
- 大西郁夫・徳岡隆夫・高安克己・石原清・梶田秀児・日下智博・熊井克己 1990「出雲平野西部の自然史」『山陰地域研究(自然環境)』第6号, 21-34頁
- 角田徳幸ほか 2006『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 岸 道三ほか 2002『新内藤川広域基幹河川改修事業地内 井原遺跡発掘調査報告書』島根県出雲土木建設事務所・出雲市教育委員会
- 古環境研究所 1993「源代遺跡・中電鉄塔関連遺跡・国富地区におけるプラント・オパール分析」『源代遺跡1』平田市埋蔵文化財調査報告第4集, 平田市教育委員会, 39-59頁
- 徳岡隆夫 1996「中海・宍道湖の完新世古地理の研究史」『島根大学地球資源環境学研究報告』第15号, 27-33頁
- 徳岡隆夫・大西郁夫・高安克己・三梨昂 1990「中海・宍道湖の地史と環境変化」『地質学論集』第36号, 15-34頁
- 徳岡隆夫・三瓶良和・渡辺正巳・竹廣文明 2000「宍道湖・中海の自然史, 開発と古代出雲」『日本地質学会第107年学術大会 見学旅行案内書』, 49-60頁
- 中村唯史 1996「山持川川岸遺跡の古環境」『山持川川岸遺跡』出雲市教育委員会,
- 中村唯史 1998「小山遺跡周辺の古地理に関するコメント」『市道渡橋平野線道路改良工事に伴う小山遺跡第2地点発掘調査報告書』出雲市教育委員会, 91-93頁
- 中村唯史 2001「下古志遺跡の立地と環境」『下古志遺跡 一本文編一』一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 出雲市教育委員会,
- 中村唯史 2006「山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷」『第四紀研究』第45巻第5号, 第四紀学会, 407-420頁
- 中村唯史 2010「矢野遺跡の立地と古地理」『矢野遺跡 自然科学分析・考察編(第4分冊)』, 1-5頁
- 西尾克己・野坂俊之 2000「原始古代の湖陵町」『湖陵町誌』, 湖陵町, 147-240頁
- 原田敏照ほか 2009『山持遺跡 Vol.5(6区)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7, 島根県教育委員会
- 林 正久 1986「出雲平野の地形とその形成過程」(石田寛教授退官記念事業会編『地域—その文化と自然—』)
- 林 正久 1989「斐伊川流域における鉄穴流しと出雲平野の形成」田中義昭編『古代出雲文化の展開に関する総合的研究—斐伊川下流域を中心として—』山陰地域研究総合センター
- 林 正久 1991「出雲平野の地形発達」『地理学評論』第64巻第1号, 日本地理学会, 26-46頁
- 林 正久 1996「出雲平野周辺の地理的環境」『出雲神庭荒神谷遺跡』本文編, 島根県教育委員会,
- 林 正久 2001「出雲平野(地形分類)」『中国地方の古地理に関する調査<調査図集>』国土交通省中国地方整備局・国土地理院
- 廣江耕史ほか 2010『山持遺跡6(4・6・7区)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8, 島根県教育委員会
- 峰松拓史 2002「井原遺跡におけるボーリング調査」『新内藤川広域基幹河川改修事業地内 井原遺跡発掘調査報告書』島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会, 147-151頁
- 山田和芳・高安克己 2006a「神門水海」の湖岸線復元—地形・地質コアによる検討—『出雲国風土記の研究Ⅲ—神門水海北辺の研究(資料編)—』島根県古代文化センター調査研究報告書34, 41-52頁
- 山田和芳・高安克己 2006b「出雲平野—宍道湖地域における完新世の古環境変動—ボーリングコア解析による検討—」『第四紀研究』第45巻第5号, 第四紀学会, 391-405頁
- 山田和芳・高安克己 2007「地質コア解析に基づいた出雲平野の形成史」『出雲国風土記の研究Ⅲ—神門水海北辺の研究(論考編)—』島根県古代文化センター調査研究報告書38, 1-13頁

挿図・表 出典一覧

図1 (大西・松井1980) を一部改変

図2 (徳岡ほか1990)

図3 (林1996)

図4 (中村2006)

図5 (山田・高安2007)

図6 (林2001) で提示された微地形分類図を、小稿に関わる地形のみ表示するよう再トレース

表1 (山田・高安2006a・2006b・2007)

表2 報告書

(1) 『源代遺跡2』平田市教委, 1994

(2) 『門前遺跡』出雲市教委, 2006

(3) 『山持遺跡 Vol.5 (6区)』島根県教委2009

(4) 『里方本郷・山持遺跡4』島根県教委, 2008

(5) 『五反配遺跡』島根県教委, 2004

(6) 『高岡遺跡』出雲市教委, 2000

(7) 『矢野遺跡』出雲市教委, 2010

(8) 『小山遺跡第2地点』出雲市教委, 1998

(9) 『中野清水遺跡(2)』島根県教委, 2005

(10) 『姫原西遺跡』島根県教委, 1999

(11) 『壱丁田遺跡(2次調査)』出雲市教委, 2008

(12) 『中野清水遺跡(3) 白枝本郷遺跡』島根県教委, 2006

(13) 『余小路・小畑遺跡』島根県教委, 2007

(14) 『藤ヶ森南遺跡』出雲市教委, 1999

(15) 『古志本郷遺跡VI』島根県教委, 2003

附表 水域復元写真に表示した遺跡・文化財一覧(1)

表示名称	指定品・指定名称等	所在地	国			県 指定	市町 指定	展示	時代
			国宝	重文	史跡				
出雲大社	出雲大社本殿 附内殿 1 基棟札 1 枚	大社町杵築東	○						江戸
	出雲大社 楼門・神饌所・玉垣など			○					江戸
	秋野鹿蒔絵手箱		○						鎌倉
	絲巻太刀 銘光忠			○					鎌倉
	赤絲威肩白鎧〈兜、大袖付〉			○					室町
	紙本墨書後醍醐天皇宸翰宝剣代繪旨			○					室町
	紙本墨書後醍醐天皇王道再興繪旨			○					室町
	紙本墨書宝治二年遷宮儀式注進状			○					鎌倉
	出雲大社境内遺跡出土品			○					鎌倉
北島国造家四脚門					○			江戸	
出雲大社参道の松並木						○		江戸	
真名井遺跡	銅戈・硬玉勾玉	大社町杵築東		○					弥生
五反配遺跡	五反配遺跡	大社町杵築東							弥生一
鹿蔵山遺跡	鹿蔵山遺跡出土品	大社町杵築南					○	○	弥生一
藤間家住宅	藤間家住宅 附絵図面11枚ほか	大社町杵築南					○		江戸
稲佐遺跡	稲佐遺跡出土品	大社町杵築北					○		弥生一
奉納山経塚	奉納山出土経塚遺物	大社町杵築北					○		室町
原山遺跡	原山遺跡出土品	大社町修理免					○		弥生一
修理免本郷遺跡	修理免本郷遺跡出土品	大社町修理免					○		古墳
修理免神光寺旧跡	修理免神光寺旧跡出土品	大社町修理免					○		江戸
南原遺跡	南原遺跡出土品	大社町北荒木					○		弥生一
旧大社駅	旧大社駅本屋 附棟札 1 枚	大社町北荒木		○					大正
	旧大社駅鉄道施設ほか					○			大正
荒木集落発祥の地	荒木集落発祥の地 附古文書ほか	大社町中荒木						○	江戸
日御碕神社	白絲威鎧（兜、大袖付）	大社町日御碕	○						鎌倉
	藍韋威腹巻			○					鎌倉
	日御碕神社社殿 附・社殿地割図ほか			○					江戸
阿部荒神社跡	阿部荒神社跡出土品	大社町鷺浦					○		江戸
河下台場跡	河下台場跡	河下町							江戸
網屋浜台場跡	網屋浜台場跡	十六島町							江戸
鰐淵寺	石製経筒 附湖州鏡 1 面	別所町		○					平安
	銅造観世音菩薩立像（2 軀）			○					飛鳥奈良
	絹本着色山王本地仏像			○					室町
	絹本着色毛利元就像			○					戦国
	絹本着色一字金輪曼荼羅図			○					鎌倉
	銅鐘			○					鎌倉
	紙本墨書後醍醐天皇御願文			○					鎌倉
	紙本墨書名和長年執達状頼源文書			○					南北朝
	鰐淵寺根本堂 附棟札 1 枚							○	

附表 水域復元写真に表示した遺跡・文化財一覧（２）

表示名称	指定品・指定名称	所在地	国			県 指定	市町 指定	展示	時代
			国宝	重文	史跡				
猪目洞窟遺跡	猪目洞窟遺物包含層 猪目洞窟遺跡出土遺物（65点）	猪目町			○	○		○	縄文一
上長浜貝塚	上長浜貝塚	西園町							縄文一
青木遺跡	青木遺跡	東林木町						○	弥生一
大寺古墳	大寺古墳	東林木町				○			古墳
大寺薬師（萬福寺）	木造薬師如来両脇土像（3 軀）	東林木町		○					平安
	木造観世音菩薩立像（2 軀）			○					平安
	木造四天王立像（4 軀）			○					平安
山持遺跡	山持遺跡	西林木町						○	弥生一
鷹巣城跡	鷹ヶ巣城跡	西林木町							戦国
美談神社古墳群	美談神社北遺跡	美談町						○	弥生
	美談神社古墳群								古墳
上島古墳	上島古墳	国富町			○				古墳
	上島古墳出土品						○	○	
中村1号墳	中村1号墳	国富町						○	古墳
多武志烽跡	多武志烽跡	国富町							古墳
山根垣古墳	山根垣古墳	西郷町							古墳
西郷廃寺	西郷廃寺	西郷町							古代
高野寺	大般若経（内補写経四帖）	野石谷町		○					鎌倉
上石堂平古墳群	上石堂平古墳群	野石谷町							古墳
南許豆神社古墳群	南許豆神社古墳群	小津町						○	古墳
木舟窯跡	木舟遺跡	小境町							平安
一畑寺	一畑寺	小境町					○		
本寿寺古墳	本寿寺古墳	岡田町							古墳
馬見烽跡	馬見烽跡	浜町							奈良
出雲屋敷	出雲屋敷	浜町					○		江戸
深田谷横穴墓群	深田谷横穴	芦渡町					○		古墳
井原遺跡	井原遺跡	白枝町						○	古墳一
白枝荒神遺跡	白枝荒神遺跡	白枝町						○	弥生一
壱丁田遺跡	壱丁田遺跡	白枝町						○	弥生一
矢野遺跡	矢野貝塚	矢野町					○	○	縄文一
小山遺跡	小山遺跡	小山町						○	弥生一
蔵小路西遺跡	蔵小路西遺跡	小山町						○	弥生一
姫原西遺跡	姫原西遺跡	姫原町						○	弥生一
中野美保遺跡	中野美保遺跡	中野町						○	弥生一
中野清水遺跡	中野清水遺跡	中野町						○	弥生一
西谷墳墓群	西谷墳墓群	大津町			○			○	弥生古墳
	西谷2号墓出土ガラス釦						○	○	弥生
山田本陣	本陣遺構（2 棟）	大津町							江戸
荻野古墳	出雲荻野古墳出土品	荻野町		○					平安
今市大念寺古墳	今市大念寺古墳	今市町			○			○	古墳
	大念寺古墳出土品						○		古墳
塚山古墳	塚山古墳	今市町					○		古墳
天神遺跡	天神遺跡	天神町						○	弥生一
長者原廃寺	長者原廃寺	上塩治町						○	奈良
大廻城跡	大廻城（向山城）跡	上塩治町							戦国
上塩治築山古墳	上塩治築山古墳	上塩治町			○				古墳
	上塩治築山古墳出土品一括					○		○	
築山遺跡	築山遺跡	上塩治町						○	弥生一
上塩治地蔵山古墳	上塩治地蔵山古墳	上塩治町			○				古墳
半分古墳	半分古墳	上塩治町							古墳
池田古墳	池田古墳	上塩治町							古墳
上塩治横穴墓群	上塩治横穴墓群	上塩治町						○	古墳
大井谷Ⅱ遺跡	大井谷Ⅱ遺跡	上塩治町						○	奈良一
三田谷Ⅰ遺跡	三田谷Ⅰ遺跡	上塩治町						○	縄文一
光明寺3号墓	光明寺3号墓	上塩治町				○			奈良
菅沢古墳	菅沢古墳	上塩治町							平安
神門寺	神門寺境内出土古瓦	塩治町					○		奈良
	神門寺境内廃寺跡	塩治町					○	○	奈良一
海上遺跡	海上遺跡	塩治町						○	弥生
刈山古墳群（小坂古墳）	小坂古墳	馬木町				○			古墳
	刈山古墳群	馬木町							古墳
朝山古墳	朝山古墳	朝山町						○	奈良
土棕烽跡	土棕烽跡	稗原町					○		奈良
法王寺	金銅観音菩薩像御正躰ほか3 軀	野尻町		○					平安
古志本郷遺跡	古志本郷遺跡	古志町							弥生
放レ山古墳	放レ山古墳	古志町				○			古墳
大梶古墳	大梶古墳	古志町							古墳
古志遺跡	古志遺跡	古志町						○	古墳一
下古志遺跡	下古志遺跡	下古志町						○	弥生一
田畑遺跡	田畑遺跡	下古志町						○	弥生

附表 水域復元写真に表示した遺跡・文化財一覧（3）

表示名称	指定品・指定名称	所在地	国			県 指定	市町 指定	展示	時代
			国宝	重文	史跡				
宝塚古墳	宝塚古墳	下古志町			○				古墳
妙蓮寺山古墳	妙蓮寺山古墳	下古志町				○		○	古墳
天神原古墳	天神原古墳	下古志町							古墳
多聞院遺跡	多聞院貝塚	知井宮町					○	○	弥生一
神門横穴墓群	福知寺山横穴群（古墳）	知井宮町					○	○	古墳
北光寺古墳	北光寺古墳	東神西町							古墳
神西城跡	神西城跡	東神西町							室町
山地古墳	山地古墳出土遺物	神西沖町					○	○	古墳
只谷遺跡	只谷遺跡	湖陵町二部							奈良
三部竹崎遺跡	三部竹崎遺跡	湖陵町三部							弥生一
西安原遺跡	西安原遺跡	湖陵町三部							弥生一
雲部古墳群	雲部古墳群	湖陵町三部							古墳
庭反遺跡	庭反Ⅱ遺跡	湖陵町常楽寺							奈良一
雲州久邑長沢焼窯跡	雲州久邑長沢焼窯跡	多伎町久村				○			江戸
矢谷遺跡	弥生（初痕付着壺形）土器	多伎町久村					○	○	弥生
経塚山古墳群	経塚山古墳群	多伎町口田儀							古墳
田儀櫻井家たたら製鉄遺跡 （宮本鍛冶山内遺跡）	宮本鍛冶山内遺跡ほか	多伎町奥田儀			○				江戸明治
朝日たたら跡	朝日たたら跡	佐田町高津屋			○				
聖谷たたら跡	聖谷たたら跡	多伎町小田			○				
	聖谷たたら跡地蔵						○		
越堂たたら跡	越堂たたら跡	多伎町口田儀			○				江戸明治
	越堂たたら跡地蔵						○		
八幡古墳	八幡古墳	佐田町大呂					○		古墳
切石古墳	切石古墳	佐田町原田							古墳
須佐神社	兵庫鎖太刀 中身無銘 須佐神社本殿	佐田町須佐		○					戦国
尾崎横穴墓群	尾崎横穴墓群	佐田町宮内				○			江戸
上野遺跡	上野1号墳出土品	宍道町佐々布				○		○	古墳
椎山古墳群	椎山1号墳	松江市宍道町白石				○			古墳
伊賀見古墳群	伊賀見1号墳	松江市宍道町白石					○		古墳
堤平遺跡	堤平遺跡	松江市宍道町白石							奈良
石宮神社	大石 猪石	松江市宍道町白石					○		
金山要害山城	金山(坂口)要害山城	松江市宍道町白石					○		室町
女夫岩遺跡	女夫岩遺跡	松江市宍道町宍道				○			古墳一
木幡家住宅	木幡家住宅 附湯殿1棟ほか	松江市宍道町宍道		○					江戸
伊志見一里塚	伊志見一里塚	松江市宍道町伊志見			○				江戸
杉沢Ⅲ遺跡	杉沢Ⅲ遺跡	斐川町直江							奈良一
軍原古墳	軍原古墳	斐川町学頭							古墳
小丸子山古墳	小丸子山古墳	斐川町学頭					○		古墳
荒神谷遺跡	荒神谷遺跡 島根県荒神谷遺跡出土品	斐川町神庭	○		○				弥生
神庭岩船山古墳	神庭岩船山古墳	斐川町神庭				○			古墳
高瀬城跡	高瀬城跡	斐川町神庭							室町
出西・伊波野一里塚	出西・伊波野一里塚	斐川町神水			○				江戸
後谷遺跡	後谷遺跡	斐川町出西							奈良
天寺平庵寺	天寺平庵寺	斐川町阿宮							奈良
原鹿の旧豪農屋敷	原鹿の旧豪農屋敷（江角家）	斐川町原鹿					○		明治
加茂岩倉遺跡	加茂岩倉遺跡出土銅鐸 加茂岩倉遺跡	雲南市加茂町岩倉	○		○				弥生
神原神社古墳	出雲神原神社古墳出土品 神原神社古墳出土遺物（除 重文）	雲南市加茂町加茂中		○				○	古墳
神原正面遺跡群	神原正面遺跡群出土品	雲南市加茂町加茂中					○		古墳
光明寺	銅鐘	雲南市加茂町大竹		○					中世
妙見山遺跡	妙見山遺跡	雲南市木次町里方							平安
斐伊中山古墳群	斐伊中山古墳群2号墳出土品	雲南市木次町里方					○		古墳
斐伊郷新造院跡	木次塔の村庵寺礎石	雲南市木次町里方					○		奈良
斐伊郷新造（尼）院跡	斐伊郷新造（尼）院跡	雲南市木次町里方							奈良
三刀屋じゃ山城跡	三刀屋じゃ山城跡	雲南市三刀屋町古城				○			中世
三刀屋尾崎城跡	三刀屋尾崎城跡	雲南市三刀屋町古城				○			中世
松本古墳群	松本第1号古墳 松本3号墳	雲南市三刀屋町給下				○			古墳
峯寺	絹本着色聖観音像	雲南市三刀屋町給下		○				○	平安
馬場遺跡	馬場遺跡	雲南市三刀屋町給下							平安
禪定寺	木造聖観音立像（本堂安置） 禪定寺本堂	雲南市三刀屋町乙加宮		○				○	平安 江戸
熊谷遺跡	熊谷遺跡	雲南市三刀屋町下熊谷							奈良平安
宮田遺跡	宮田遺跡出土縄文時代遺物 宮田遺跡	雲南市三刀屋町多久和				○			縄文 縄文一
安田家住宅	安田家住宅	雲南市三刀屋町多久和					○		江戸
日倉城跡	日倉城跡	雲南市掛合町掛合					○		中世
山根横穴墓	山根横穴墓出土品	雲南市掛合町松笠					○		古墳